『本のれきし５０００年』

川崎市立東小倉小学校六年　田島（たじま）　友輝（ともき）

「五千年も前に本があったなんて、僕には信じられない！」そう思って、この本を手に取った。なぜなら僕が特に好きなのはマンガだから。歯みがきをしながらでもマンガを読んでいい！」と怒り、母に「ちゃんとはみがきをしなさい！」と大好きだ。それほどだ。この本は絵や写真が多くあるもので、マンガが好きな人も楽しく読める。長い本や歴史が好きな人でもめるので、ぜひ読んでほしい。

目を見張った。紀元前十五世紀には、粘土で作った封筒があった。それは一度開けたら二度と作り直せず、粘土がかわく縮むことを利用したとも賢い封筒だ。三千年以上も前の人達も、今の自分たちと同じように「見られないよう工夫しよう！」と考えていたところを想像すると、クスリと笑ってしまう。僕は自分の悪いと思った。

十五世紀初め、グーテンベルクが活字印刷の技術を開発して、本をつくる効率がぐんと良くなった。それ以前の人は版を作る苦労が想像できる。僕も図工の版画の時に版を作ったときに、その労力を身をもって感じた。

この本を読んでおもったことはよく「この本は宝物だ！」と言う人がいるが、それはもしかしたら内容だけでなく、本の長い歴史をどこかで感じているかもしれない。

僕は本がただの読み物ではなく、何千年もかけて世界中の人々が大切に作り続けてきた「宝物」だということが分かった。僕もマンガを読むとき、その歴史の一部を手にしているのだと思うと、今までよりももっと大切に読みたくなった。